令和８年１１月定例会一般質問発言通告表

発言順序	１７	議席番号	５	氏名	赤　池　弘　源　　議員	１／２

発言項目	要旨	答弁者
１　なぜ今、下水道計画を見直すのか～水環境保全と市民の納得を問う～	本市の下水道事業は昭和45年の事業着手以来、人口増加を見込んだ計画のもとで整備が進められてきた。全体計画面積約2,700ヘクタールに対し、整備済み面積は約1,500ヘクタールである。現在の年間約５ヘクタールという整備ペースでは、未整備区域の整備完了までに200年以上を要することとなる。人口減少などの時代背景の変化を踏まえ、昭和の時代に示された計画を今日において見直すことは、大変意義のあることであると考える。その上で、現在示されている全体計画から411ヘクタールを縮小する方針について、本質問を通じて、市民・議会・行政が共通の認識を持つことにつながればと考え、以下の点について市当局の見解を伺う。 (1)　全体計画から411ヘクタールを縮小する方針について、その考え方と対象地域の選定理由を伺う。 (2)　計画区域から外れる地域の住民の生活環境や費用負担への影響をどのように認識しているのか。また、本市の合併処理浄化槽への転換に係る補助制度の現状、利用実績及び今回の計画の見直しを踏まえた今後の転換促進策について伺う。 (3)　見直し後も残る未整備区域の整備方針と完了までの見込み期間を伺う。また、今後も人口減少に合わせて計画を随時見直していく必要があると考えるが、本市のまちづくりに関する関連計画との整合性をどのように図っていくのか伺う。	市　長 副市長 教育長 関係部長
２　クマを知り、共に生きる	近年、本市でもクマの出没が頻繁となり、注意喚起により散歩やＰＴＡ活動など市民の日常的な社会活動に支障が生じている。ここ３～４年で顕在化し始めた段階の課題だからこそ、安全確保と社会活動のバランスを取りつつ、「駆除か、放獣か」の二択を超えた、長期的な視点を見据えた新たな選択肢が必要と考える。 かつては全国の神社など身近な場所に保護されたクマ等の生き物がおり、地域の中で自然と距離感を学んでいたが、社会構造の変化によりそうした場は失われた。一方、埼玉県寄居町で保護されたツキノワグマの事例に関する報道では、専門家がクマをただ恐れるのではなく、「正しく恐れる」環境教育や学びの機会につなげる重要性を指摘している。 さらに、本市は第６次富士宮市総合計画で将来都市像を「富士山を心に、人の和と豊かな自然が織りなす、幸せ感じる富士宮」と位置付けた。これらを踏まえ、自然の一部であるクマへの理解を深め、共存していく新たな視点を持つことについて、市当局の見解を伺う。 (1)　注意喚起と市民の社会活動のバランス及び長期的な課題認識を伺う。 (2)　社会構造の変化や専門家の知見を踏まえた「環境教育・学びの機会づくり」において、行政としてできることを伺う。 (3)　第６次富士宮市総合計画の将来都市像を踏まえ、自然の一部であるクマと共存していく方向性で本課題を捉えることについての見解を伺う。	市　長 副市長 教育長 関係部長

令和８年１１月定例会一般質問発言通告表

発言順序	１７	議席番号	５	氏名	赤　池　弘　源　　議員	２/２

発言項目	要旨	答弁者
３　特定外来植物から守る、富士山の生態系と地域の暮らしについて	富士山麓には豊かな自然環境が広がっているが、近年、外来植物の繁殖による在来植物や生態系への影響が懸念されている。特に、特定外来生物に指定されているアレチウリやオオキンケイギクについては、市民からも繁茂や駆除に関する情報が寄せられており、生態系のみならず、河川環境や景観、周辺農地への影響も危惧される。 外来植物は、一度広がると根絶が困難であるため、早期の実態把握と、河川管理者や関係機関、市民と一体となった継続的な防除が不可欠である。そこで、富士山麓の豊かな自然環境を将来にわたり守るため、以下の３点について伺う。 (1)　アレチウリやオオキンケイギクをはじめとする特定外来植物について、本市における生育状況と、これまでの実態把握及び防除の取組について伺う。 (2)　河川管理者である国・県や関係機関との連携による広域的な防除体制について伺う。 (3)　市民への普及啓発と、地域やボランティア等との協働による防除活動の推進について伺う。	市　　長 副 市 長 教 育 長 関係部長